稲山会 通信

第22号

2011年1月10日発行

発行人：斉藤雄二　発行所：稲門山の会事務局　TEL03-3367-3723　FAX03-3367-8150　©稲門山の会1998

平成23年を迎えるにあたり

山が好きで山の会に入ったのか、入ってから山が好きになったのか、それはどちらでもよいのです。兎も角も早稲田の学生となり、皆さんは、部活として山の会での生活を少なくとも数年は経験しています。この経験、体験は、長い人生のほんの短い年数ではありますが、かなり強い印象をもって胸の中に存在しています。思うに、この数年の中には、日常では得られない、輝くような空間がありました。

山に登ることにより通じ合った仲間意識、山そのものの良さ、これらを共有した者達の山での生活、街での生活、学校での生活を通じて、生粋の絆が形成されてきたのではなかろうか。懐古の趣味はなく、昔は良かったなどと云う気はさらさらありません。しかしながら、学生時代のこの数年で培われた良きものがあったからこそ、50年以上も会が存続しているのではなかろうか。ここにこそ、会の前途に広がる更なる要素があるように思われます。

近頃、山に登る若者が少なくなっていると聞きます。確かに山の世界、世の中をめぐる諸情勢の変化は認めますが、一方で、高校の山岳部、ワンダーフォーゲル部、大学の山関係のサークル等で、かなりの若者が山に登っているという事実があります。居ないことは無い、山に登る人は居るのです。

この様な若者が少しでも居るならば、我らが経験、体験したものを、「熱い思いをもって味わって貰いたい」と云いたい。山の会での経験は、後の人生に必ずや強い印象、良き影響を与えると確信します。熱く云える土壌が、この山の会には立派にあります。そこで生活してもらう為に、稲門山の会は強い信念をもって努力したいと思います。

格言

先輩からは知識、経験を学べ。

後輩からは感性を学べ。

2011年1月

稲門山の会　代表　上田訓央

新年会のご案内

Time flies like an arrowといわれますが、2006年に「早稲田大学山の会」創立50周年記念をOBG皆様とお祝いしてから、本年2011年は早や「創立55周年」を迎えます。

日本人によるヒマラヤ・マナスル初登頂に沸いた時代から、「山の会」が数々のチャレンジ、或いは試練、困難に向かい合いながらも、よわい55歳となりました。

世の中の山登りの世界も変わり、若者の登山観も大きく変化してきています。

しかし私達の山登りから培ったものは今でも脈々と続いています。それは、同期の仲間、先輩、後輩との絆です。

創立55周年の節目であります今年の「新年会」には仲間達と誘い合い、是非ご出席下さる様にお願い申上げます。

新年会は2011年２月５日（土）午後３：00から、会場は恒例の大隈会館です。

別途に「新年会のご案内」と出欠の「返信ハガキ」が同封してあります。

稲門山の会役員会

報告：花の同期会

吉田　稔（S.38年卒）

昭和36年・37年・38年卒の「花の同期会」が2010年６月25日（金）集合、26日（土）解散の日程で、秩父の新木鉱泉旅館で行われました。

参加者は写真にある通り17名でした。（　）内は卒業年度です。

前列左から、竹内敏（37）、白倉俊夫（38）、高尾勝彦（37）、吉田稔（38）、打矢之威（37）西山賢嗣（36）、篠崎貞雄（37）さんです。

後列左から、松村啓之亮（38）、鈴木健夫（37）、加納孝治（37）、山本道明（37）、恩田和夫（37）、宇野澤虎雄（38）宮沢壮介（36）、東正躬（37）荒川秀夫（36）、篠原弘（37）さんです。

▲2010年初夏：花の同期会

報告：秋のキャンプ

齋藤延雄（S.45年卒）

2010年度秋のキャンプを、前年同様に東丹沢清川村の＜座間市立清川自然の村＞で10月２日（土）～３日（日）に開催し、25名の方々に参加戴きました。

当日は天候にも恵まれ、予定時間の午後３時には全員が現地に集合、先ずはお互いの健康を祝しビールで乾杯。

一段落したところで井村副代表から挨拶をいただき、続いて安全登山を祈願して、上田代表に恒例の「山の神への祝詞」をお願いし、キャンプを予定通りスタート。

夕食のバーベキューと豚汁で腹を満たし適度に酔いが回った頃、皆でキャンプファイヤーを囲み、昔懐かしい山の歌を楽しみました。皆さん歌集を見ながら頑張りました。キャンプファイヤーが消えかける頃、歓談の場所をバンガローに移し、これまた恒例となったイベント、上田代表に日本舞踊を披露いただき、皆様心安らかにおやすみになりました。

翌朝は、夜も明けきらぬ頃からゾロゾロと起床、全員揃って朝食をとり、記念撮影の後８時30分頃解散しました。

天候に恵まれ、大勢の方々に参加いただき、アルコールも充分に確保できた楽しいキャンプでした。 皆様、次回も是非ご参加下さい。

○参加者

上田・三ツ木（S34卒）、清水（36卒）、打矢（37卒）、松村・臼倉・吉田（38卒）
梅崎・関根・斎藤（洋）・山崎・長谷川・井村（40卒）、斉藤（雄）・杉村・金子（41卒）
佐久間・迫田（43卒）、齋藤（延）・青山（45卒）、島田・新井・福田（46卒）、
豊田（47卒）、天野（Ｈ５卒）＊平成卒年の方に初めて参加戴きました。

▲2010年10月：秋のキャンプ：全員集合

投稿：剱岳・立山山行

吉田　稔（S.38年卒）
同行者：吉田香織（長女）

日時：2010年　9月4～6日

9月4日（土）

酷暑の続く東京を7：00に発って室堂に13：00着。刺すような陽射しの室堂は2400mの高みでも涼しくはないとがっかり。

13:30　快晴の室堂を剱御前小舎に向かう。標高差500mの油照りの登りをあえぎあえぎ汗にまみれて、16：50小舎の脇にへたり込む。久しぶりのバテバテ。後ろの香織は涼しい顔で剱岳に魅入られている。明日の挑戦に闘志を掻き立てているようだ。山登りでは経験よりも体力と若さか。剱を眼前に見据えながら一時間弱の下りも足がもつれる。

17:50　剱沢小屋着。ベンチで夕陽を浴びる剱岳に見とれる。2食付￥9,000でお蚕ベッド、汗まみれの体にシャワーを浴びて夕食に向かうが情けなくも食欲がわかない。調理場に頭を下げる

更なる苦難は上段ベッドの暑さ、堪らず起き出たら満点の星に縁取られた黒剱が圧し掛かってくる。2：00になると周囲が出立の準備に動き出す、ルートに明かりが連なっている、天気はよいが悪所の足場は大丈夫だろうか。こちらはラッシュアワーを外してノンビリと5：00の朝飯を済ませてから出かけることにする。ピークまでの10を越えるクサリ場と梯子は順番待ちの列になり何時間で通過できるか予測は難しいとか。

9月5日（日）

6：00　快晴・無風、寒気覚えず。残存氷河を渡り剣山荘を回りこみ、2箇所のクサリ場を過ぎ一服剱へ　6：55。

眼前の前剱と剱岳のルートを探るとも判らず、ピークに人の動きだけが目に入る。いったん右手武蔵谷からのコルに下り、大岩左側を回りこみ何箇所かクサリ場を越え、前剱2813mに8：10。この辺りからは混雑を緩和するために、尾根の右を「登り」、左を「下り」とルートが決められている。

右手の平蔵谷の切れ目の門をブリッジで渡り、クサリ場の連続をすぎて平蔵のコルへ。梯子を登りきって、此処からが名高いカニのタテバイ「登り」とヨコバイ「下り」、最後の詰めに入る。右手平蔵谷から尾根に取り付いているパーティーが見える。

10：10　剱岳頂上2999m着。早月尾根を夜中の0：00に出てたった今到着した若者たちが活気を振りまいている。賑やかな団体さんに先を越されると下りで時間待ちになりそうなので、腹ごしらえも早々に下りに掛かる。カニのヨコバイを下りて合流点のトイレを覗いたが、用足しする気がなくなる。戦後によく見かけたあれでトタン屋根のバラックに穴を掘り二本の板を渡したやつ。

途中停滞もなく剣山荘に13：15着。ゆっくりとビールを味わい休憩する。この年で剱に戻ってこられるとは、感慨ひとしお。となりで香織がまたまた涼しい顔で動き回っている。この剣山荘は300人以上収容でき設備も申し分なさそうだ。生ビールもあり、トイレは通常の水洗。但し剱の足元に近いので景観は剱沢小屋には劣る。

剱沢小屋14：00着。流れる雲が時折剱を隠し、東のほうで雷が光り足元に小雨が落ちはじめた。山へまわるかどうかは明日の天気次第と弱気になったが、折角来たのだからと香織の意志は固そうだ。

9月6日〔月〕

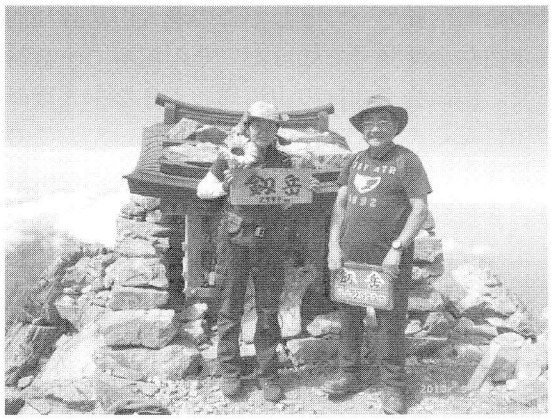
今日も上天気との小屋の人に背中を押されて、5：15剱沢小屋を出る。剱御前小舎に戻り、今度は左手の別山乗越から真砂岳2861mへ8：00。

左手黒部側からの内蔵助カールの残存氷河は途中までで、広々とした草原が広がっている。黒

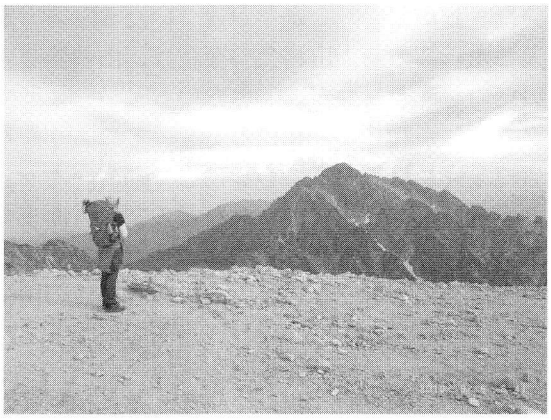
部からのルートは長いが登り易そうだ。内蔵助山荘は改築中。富士の折立を回りこんで、大汝山3015mの小屋へ９：15。ここは雷鳥荘の経営だそうで、住み込みのご主人の話によると、奥の立派なトイレ使用料は￥100、なんでもヘリで４回材料を運びあげ都合５千万円かかったとか。緊急避難とか、学術研究目的とかの場合には、宿泊OK。神仏混交の宗教登山団体が、引きもきらずといふ状態で、今年の夏は３ヶ月も下に降りていないそうだ。それにしてもこんな山の上で、一人きりで過ごす人の心のうちを覗いてみたくなる。

切れ目のない登山者と道を譲り合いながら、雄山3003mから一の越山荘を経て室堂へ帰着11：50。

乗り継ぎもよく18：20には東京へ戻れた。この次には槍か赤岳とせがまれそうだがこちらの体が持つかどうか。



▲2010年夏：親子で剱岳山頂



▲2010年夏：剱岳を見る

▲2010年夏：小屋のご主人と香織

コースタイム：

９月４日〔土〕

東京発７：00（とき303）～富山着10：14

富山電鉄　立山　ケーブル　高原バス美女平～室堂

10：30　11：29　11：40～11：47　12：00　12：50

室堂13：30－雷鳥沢14：30－剱御前小舎16：40－剱沢小屋17：50　泊　（バテバテ）

９月５日〔日〕 快晴

剱沢小屋６：00－一服剱 ６：55－前剱 ８：15－剱岳10：10

剱沢小屋着14：00　泊 〔往復のクサリ場・はしご場とも待ちなしで快調なピッチ〕

９月６日〔日〕快晴

剱沢小屋５：15－剱御前小舎６：15－別山７：15－真砂岳８：00－富士ノ折立－大汝山ヒュッテ９：15－雄山10：00－一ノ越山荘　11：00－室堂11：50

富山～東京18：20帰着

投稿：老人山岳会と山登り

松浦（山本）正道（S.42年卒）

平均寿命が世界一となり老人がいろいろな分野で活動し、健康志向ブームが続いている。このような中、山登りの分野でも中高年登山者がその75％位を占めており、高齢者の山岳遭難記事もあとを絶たない。そういう私も現在東京のとある老舗の中高年山岳会（いわゆる老人山岳会）に属し、会社に週３日務める傍ら毎週のように山登りをしている。私の場合もご多分にもれず、大学を卒業後引き続き会社の山岳部で５年ほど山登りしたのち、本格的な山登りからは遠ざかっていた。しかし会社の定年が近づいた６年前、定年後の余暇活動の一つとしてこの老人山岳会に加入した。この老人山岳会の存在は、山の雑誌の中高年山岳会特集号で知った。その記事で一番驚いたのが、会員数が1000名もいるということであった。山の会や会社の山岳部のような少人数のクラブしか知らない私にとって、どのような形態で山に登るのか全く想像もつかなかった。この会でも会長以下いろいろな役員や部会があり、事故対策などの各種訓練や雪山・岩山などの山登りから、カメラやスケッチなどの文化方面まであり、会員数1000人となるとその活動の幅も広い。これらことは部外者にも容易に推察できるが、このような巨大な老人山岳会ならではのことにも、色々出会ってきた。以下入会以来６年この山岳会で私が経験したことについていくつか紹介しよう。

▲2008年４月：谷川岳西黒尾根にて（松浦が撮影）

▲2009年10月：カラパタールにて

▲2010年８月：ヨーロッパアルプスにて

先ずは山行の方法である。この会では山行は約70名いるリーダーが企画立案・募集・実施する。山行の下見を含めすべて基本的にはボランティアである。会としては山行計画を山行審査会で検討し、OKとなれば、毎月発行の会誌に掲載し、それを読んで希望の会員が担当リーダーに参加申込みをするという形態をとる。山行は10名以下の小規模なものから30～40名程度のハイキングまで様々であるが、一般的に後者の参加者が多い。申込みの採否を含め山行に関してはリーダーの役割がかなり強い。またリーダーのキャラクターが大きく物をいう。会はリーダーという個人商店の集合体として運営されているともいえる。これがマンモス山岳会を維持できる基本構造である。山行のグレードには雪山・岩稜・連泊縦走のA級から街中を歩くE級まであるが、困難なAランクの山行では、そのリーダーの山行の常連が中心を占め、新規のメンバーはほんの数名程度にとどめている。入会当初は「行きたいものはこの指とまれ」方式の募集で、難しい山なぞ行けるのかと疑問であったが、このような仕組みであった。リーダーになるには入会３年以上で複数の幹事の推薦が必要だ。若いころから山をやっており経験の豊富な人は比較的短期間でリーダーになれる。山行は基本的には自己責任であり、見合った山岳保険を掛けていないと参加できないようになっている。しかし自己責任といっても、実際の遭難事故ではリーダーの責任も問われることも少なくないようだ。会山行に入りきれない困難な山行や仲間内だけで行う山行は、個人山行として行っていることは言うまでもない。他方、旅行会社の募集するガイドつきツアーに参加する人や海外の山に行く人も結構いるようだ。

私の参加している山岳会はいわゆる街の山岳会であるので、会員の構成はその職業・職歴や学歴など実にさまざまだ。山歴も、若いころは有名な山岳会で数々の難しい岩登りをしてきた人から、山登りを始めて数年という初心者までと多彩である。このバラエティに富む構成員というのもまた初めての経験であった。山行の帰りには反省会と称して飲み会を行うことが多いが、そこで意外な出会いもままあり、これも山行の大きな楽しみである。構成メンバーの男女比率では女性が７割くらいと、圧倒的に女性上位である。この辺は男性会社員が定年後に地域デビューしてみると、おかみさんパワーに圧倒されるというのと全く同じである。男は会社を離れると抜け殻になってしまうのかしら？　話の内容も会社時代の男同士のものから、世間話へと大きく変化する。「綾小路きみまろ」の世界となる。また老人なので、山行中でも結構わがままなところもある。ここら辺を束ねるのがリーダーの技量だ。ヒューマン的要素が強いのも老人山岳会の一つの特徴であろう。

病気や死ぬことにも時として直面するし、話題にもなる。最近見かけないというと、病気になったのかしらとか、亡くなったのかなという具合だ。これは老人山岳会特有の現象と思われる。死ぬということの受け止め方が、若いころとだいぶ変わってきている。死ぬということをある程度受容しているところがあるように見える。他方、癌など体に大病を抱えているが故に？熱心に山に登っている人も少なくないようだ。また癌患者の山登りの団体にも入っている人や、眼などの不自由な人の山登りを行っている団体を支援する、ボランティア活動をしている人たちも結構いる。山登りのリーダーたちのケアの対象も、A級やB級などの比較的グレードの高い山では山行そのものが中心であるが、C級以下の山行では健康や体調面のケアも大切になってくるようだ。なにせ80歳台後半でも参加する人もそれほど珍しくないのだから。山をやっている人は、普通のひとより10歳は若いというのが仲間内での定評だ。親子で会員というのも何組もいる。そしてPPK（ピン・ピン・コロリの意味）が望みである。

よく云われることであるが、若いころ山を登っていた人は、自分は山をやって来たのだからこれぐらいの山は問題ないと思っている人は結構多いようだ。しかし実際はもう老人なのだ。頭と体は別物なのだ。老人にとっては実際の山では経験よりまず体力である。体力があってはじめて

経験が生きてくることを決して忘れてはならない。そして病気はいつ襲ってくるかわからない。老人になるほどその確率が高くなる。であるので、ちょっとした山以上では老人の単独山行は決して行ってはならないと思う。他の人と一緒なら助かったかもしれないという話はよく聞く。できればこのような老人山岳会でも入って仲間たちとわいわい楽しく山を味わっていただけたらと願っている。なにせ山小屋は、食事もトイレもきれいになったし、登山装備は我々のキスリング時代より格段に進歩したし、ちょっぴりお金の余裕もできたし、仲間と割勘でタクシーに乗ればお金も時間も節約になる。そして健康になる。こんな好条件を使わない手はないでしょう。

2010年11月12日記

稲門山の会　ホームページ（HP）のご案内

稲門山の会役員会

OBG会員の皆様は、稲門山の会のホームページ（HP）があること、ご承知のことと思いますが、内容もだいぶ充実してきましたので、再度ご案内しておきます。**稲門山の会**で検索してもHPがでてきますが、http://wmsob.jp/で検索していただければ、より確実にHPがでてきます。

皆様の投稿は大歓迎ですので、山行等の文章と写真を、担当の金子治雄（S41年卒）までメールで送って下さい。写真は出来れば600×400ピクセル位に縮小して送って下さい。金子のメールアドレスはharu-kaneko@jcom.home.ne.jp です。

日本山岳救助機構（jRO）――
山岳遭難捜索救助費用カバレージ制度の紹介

渡辺征二（S.42年卒）

いきなり聞き慣れない表題で恐縮です。平たく言えば当会が加盟している東京都山岳連盟の“山岳保険みたいなもの”で、その概要を紹介します（以下で、“jRO”ジローと略）。

1. 加入のいきさつ

2002年に浜田研究室の学生を核にして、山の会の活動が活発化しました。その後、次第に雪山へも活動の輪を広げたこともあって、遭難対策の一環として保険加入の必要性から、種々比較検討の上、2004年、東京都山岳連盟の遭難共済に加入しました。その後、保険業法の改訂があり、現在のものになりました。厳密には保険とも共済とも異なる制度のため、上記の様な名称になっていますが、利用する立場からは、掛金の支払い方法が異なるだけで殆ど各種の“共済”と同じです。

2. 制度の概要

1）会員：早稲田大学山の会（稲門山の会）は東京都山岳連盟に加盟しており、これをご覧の会員の皆さんは団体会員として“jRO”に加入できます。

2）会員期間：４月～翌年３月（加入手続きは２～３月、希望者には別途案内）

3）会費：・入会金（入会時に支払い、初年度のみ）　￥1000（2010年度）
・年会費（入会時に支払い）　￥2000（2010年度）
・事後分担金（年度末３月に支払い）　￥800（2009年度実績）

4）対象の山岳スポーツ：
日本国内での山岳遭難で登山、ハイキング、岩登り、アルパインクライミング、沢登り、雪山、フリークライミング、ボルダリング、山スキー、スノーボード、マウンテンバイクほか（詳細は規約参照）。

5）補填対象：
○捜査・救助費用○移送・搬送費用○交通費・日当・宿泊費・消耗品費○謝礼費用
○遺体搬送費用○活動中の発症、持病に起因する遭難が対象だが、医師の診断書要す。

6）限度額：最大330万円

7）その他：
・事後分担金：当該年度中に発生した遭難に対する補填金を全会員数で公平に分担するもので、金額は年度末に確定。一種の後払い方式。
年度末にも徴収することになるのでご注意下さい。
・詳細は“日本山岳救助機構合同会社規約集　H21年11月１日改訂、H22年４月１日施工”をご参照下さい（上田、井村、渡辺が保管）。

問い合わせ先：稲門山の会役員会　担当渡辺征二

2010年12月８日記

「春スキー」のご案内

今回で21回目となる、2011年度「山とスキーの会」を以下の通り計画致しました。
往復共、貸切バスで、バス内で懇親をしながらの楽しいスキーの会です。
今回の場所は、過去、何回か開催しました「乗鞍高原」です。宿はゲレンデに歩いて直ぐ行ける便利な場所で、気持ちの良い温泉宿です。お誘い合わせの上ご参加下さい。

日程：2011年２月18日（金）19：00　東京駅丸の内北口集合、現地に23：00頃到着
２月19日（土）終日スキー
２月20日（日）午前中滑って、13：00現地出発、19：00東京駅着

宿泊宿：「みたけ荘」　〒390-1513長野県松本市安曇4291-１乗鞍高原温泉
電話　0263-93-2016

会費：大人　32,000円、小学生以下の子供　24,000円

申し込み期限：2011年１月18日（火）

申し込み先：山とスキーの会　市村栄一
〒港区新橋5-7-2　Tel　03-3436-3237　Fax　03-3436-3238
E-mail　e-ichimura@mbi.nifty.com

会費振込み先：三井住友銀行　日比谷支店　普通預金　1750869
口座名義　山とスキーの会　市村栄一

「高松山・春のハイキング」のご案内

1）日　　時　2011年４月２日（土）　10時集合
2）集合場所　小田急線新松田駅　改札口
3）コース　　駅→(バス・10分)→高松山入口→(30分)→高松橋→(60分)→尺里峠→(40分)→高松山→(20分)→ビリ堂→(55分)→高松山入口
4）昼　　食　各自持参下さい
5）その他　　雨天中止
6）問い合わせ　＆申し込み　齋藤延雄（昭和45年卒）電話（自宅）045-831-1792
メール　yuiyui@zg7.so-net.ne.jp
新井昭夫（昭和46年卒）電話（自宅）048-461-0783
メール　araia@nifty.com

是非皆様、お誘い合わせの上参加ください。

訃報：2010年７月に五十嵐健さん（S.40年卒）が逝去されました。故人を偲び、ご冥福をお祈り申し上げます。

編集後記

明けましておめでとうございます。

昨年は政治・経済が低迷し、「もうあかん（菅）」と思われましたが、他に代わる人も見当たらず、今年も政治・経済の低迷に耐えざるを得ないようです。

しかし我らが母校、早稲田大学は、昨秋、野球では早慶戦に勝ち優勝し、ラグビーでは早明戦に勝ち優勝し、たぶん新年の箱根駅伝にも優勝し、３冠王になって、OBも元気になれるのは嬉しいことです。

山の話題ですが、最近は山ガールが増えて、山のファッションも進んでいます。S41年卒の高齢者３人組みが、昨年９月に五竜岳に登った時、剱岳を背景に、山ガールと写真を撮るのに成功しました。写真添付しておきます。

山ガールを追って、若い男性も山に登り、若い男女で山頂が占拠されるようになれば、爺婆はもう山から引退してもよいのかもしれません。山の会の現役も元気になって欲しいものです。

斉藤雄二（S.41年卒）

▲2010年９月：五竜岳からの下りで（遠見尾根から）鹿島槍北壁

▲2010年９月：ファッショナブルな山ガールとS41年卒高齢者３人組